

家庭教育論者・母性教育論者

としての

ベスタロッチ

吉岡千秋

ヨハン・ハインリッヒ・ベスタロッチ
(Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1807)
の名前は、人々は人類の歴史に於て、永遠に忘れることは出来ないであろう。
貧者の味方として、民衆の救済家として、ベスタロッチこそは、スラムの教育者であり、百万庶民の友人であり、父であったという事が出来るであろう。

ベスタロッチが、人間の教育に於て、如何に家庭に於ける教育、即ち家庭に於ての人間形成作用が大きなものであるかを痛感していたか、——このことは極めて周知の事実であるが、ベスタロッチに帰れとの言葉と共に、我々は今一度、このことを簡単にふり返って見たいと思う。

二

勿論、ベスタロッチ以前に於ても、人間形成についての家庭の有する価値、乃至意義を高く評価した人の一再に止らず、数多くいることを、我々は知っているのである。
特に、幼児の時代に於ての家庭の教育が大事な意義を有することを強調すること、は、人々の口を等しくするところであることは茲に言うまでもないであろう。
周知のとおり、プラトンは、その「ポリテイア」に於て如上の問題にも触れている

わけであるが、彼も又、幼児期に於ては家庭教育の重大なることを主唱し、とくに六才頃までは母による教育の必要性を説いている。

ところが、ギリシャに於てはそうでもなかったのに、ローマに於ては、「家」というものが、極めて重い比重を以て、ローマ人の心の中を支配していたのであった。

即ち、ローマに於ては、又「家」というものは、祖先を祭る場所であると共に、人間教育の道場であったということが出来るであろう。

今、私はローマ時代の家庭教育の実際について詳述する暇は持ち合わせないのであるが、ローマ時代の家庭教育を考えて見る時に、一見奇異の感に打たれることがある。それは、ローマ時代に於ては、家庭に於て父が極めて重要な位置を占めていたことである。

即ち、ローマ時代には、母と共に父も又、家庭教育に於て、重要な役割を演じているということである。

それは、ローマに於ては、父は絶対的な権力の所有者であつて、その子供の生涯を通じて、生殺与奪の権を持っていたという事実にも起因するであろう。

ローマの家庭教育の實際の有様は、ブルタルクスの「英雄伝」の中の大カトー(Cato, B. C. 234~149)の伝記によつて、かへつて出て来る。

三

ジャン・ジャック・ルソー (Jean Jacques Rousseau, 1712~78)は近世に於ける教育界の革命児であることは、更めて茲に述べるまでもない。

消極教育、乃至、教育をしないようにすることが教育であるという一見皮肉的、逆説的言辭を弄する彼としては、当然、家庭の教育的価値の大なることを認めざるを得ない。

即ち、ルソーによると、父は自然の教師であり、母は自然の保母であつて、かかる教育的使命を自覚せざる人は、人の子の親となる資格の欠けているものであると考へている。

勿論、ペスタロッチーも又ルソー教育学の流れに倣す人であつて見れば、彼と同じく、家庭教育の意義と価値とを高く評価した人であるということが出来る。

即ち、我々は、彼の書物の何れの部分をひもといて見ても、其処には、彼の家庭教

育の讚美の聲が聞かれるのである。

今、試みに、彼の教育論の核心の書とも見られるべき「隠者の夕暮」(Die Abendstunde eines Einsiedlers, 1780)の中を開いて、その「二」の言葉をとりあげて見ても

「人間の家庭的關係は、第一の且つ最も著しき自然的關係である。」

「職業及び階級のための人間教育は、純粹なる家庭の幸福を樂しむという究竟的目的の低位に立たねばならぬ。」

「故に父の家よ、汝は人間のすべての純粹なる自然的教育の基礎である。」

「人間よ、汝は第一には子供である。然る後に汝の職業の徒弟である。」

彼は人間教育をあらゆる教育の基礎陶冶として考へ、他の教育は、即ち、階級教育職業教育、徒弟教育等等は、その基盤の上に構築されるものであるとしたのである。

四

ペスタロッチーが家庭教育論者であり、さらに又母性の家庭に於ての占める教育的役割の重要さを強調し、そしてそれらに彼の教育的基盤を有することは、人は誰でもがさうであるように、彼も又その環境と、

その生立ちとに起因するところが大であるように私は思う。

即ち、彼の自伝とも稱すべき「白鳥の歌」(Schwanengesang, 1836)の中に於て、それを裏書する彼の告白的叙述を我々は見ることが出来るのである。

例えば

「私の父は早く死んだ。而して私は六才の時以來、私の周囲に於て、此年頃の男性的な力の陶冶に甚だ必要である所の凡てのものを欠いていた。」

この点に関して、私は何人よりも一そう女育ち、母育ちとして、最良の母の手で成長した。人々が私たちによく言う様に私は年々炉の後から出たことがなかつた。

要するに男性的な力、男性的な経験、男性的な思考、男性的な訓練の凡ての本質的な手段刺戟は、私が自分の性質と弱點の爲に、之を必要としたのと同程度に於て欠けていたのである。」

「私の母は全く自分を忘れ、彼女の年令や彼女の周囲に於いて彼女の心を惹いたでもあろう所の凡ゆるものを断念して、ひたすら三人の子供の教育に一身を捧げた。」

ベスタロッチャーは、一人宛の兄と妹とを持つ三人の兄弟妹であった。

しかし、今日我々の手許に残された資料から、この只一人の兄についての詳しい消息については知る由もないのである。殆んど書き残されていないのだから……

六才にして、父親と死別した彼は、その後母、一人の妹、下婢バベリーなどと共に成長したのである。

従って、彼の自伝にも記されたように、彼は極めて男性的な要素の欠けた、女性の世界で成人して行ったのである。

だから、前述の彼の告白的叙述にも見られるように、彼には極めて男性的要素の欠けた少年として成人して行ったわけである。

然し、ベスタロッチャーは、恵まれた母を持つていたことは幸せであった。そうした点を考えて見る時に、幼くして母と別れるという事は、人間として何という不幸なことであろうか。

ベスタロッチャーの母は、我が子の教育に実に心を砕いたのである。

経済的にも余り恵まれなかったらしいベスタロッチャーの母は、自分の一人の息子のために実に細かい心やりをしなければなら

なかった。

そのことは、次の文章によっても、我々は容易に知ることが出来るであろう。

私はこの告白を読むと、いつでも必ずと目頭が熱くなるのを覚えるのである。

前述した如く、ベスタロッチャーの母は、彼が六才の時に、その夫ヨハン・バプチスタと死別して寡婦となったのである。

「寡婦となった私の母の地位は異常なる節約を必要ならしめた。しかし乍ら、我がバベリーがつくしてくれた心労（この場合、殆んど不可能を行わうとするに等しい）。は信ずることが出来ない位である。野菜や鶏卵の一角を五六銭安く買うために、彼女は三回も四回も市場へ出かけて行って、商人が家へ帰るのを急ぐ時を待った。

この異常な節約（さうしなくては私の母の収入は家計を支えることが出来なかったであろう）は万事がこの調子であった。」

更に又、こんなこともあった。

「我々子供が別段用もないのに町へとび出すとか、何処かへ行こうとする時にはバベリーは次の言葉を以て我々を呼びとめた。

「なぜ、あなたたちは衣服や靴を無駄にいためるのですか。あなたたちのお母さまは、あなたたちを教育するために色々のものを御辛抱なすっていらっしゃるのが分りませんか。お母さまは、幾週も幾日も何処へも行かないで、あなたたちの教育に必要なお金を少しでも余すようにしていらっしゃるじゃありませんか」

彼女自身に関しては、彼女が家計の為に如何様になっているか、その為に彼女が如何に自己を犠牲にしているかについて、この尊き少女は一言も我々に語らなかった。」

ベスタロッチャーは、情愛深きよき母に恵まれると共に又、彼は秀れた下婢バベリーにも感謝しなければならぬ。彼が後年、家庭教育論者として、はたまた母性教育論者、女性教育論者としての基礎はかかる彼自身の幼年時代の、母の、そして又女性の感化によるところが大きいと言わなければならない。

ベスタロッチャーの家は、そのように経済的には恵まれていなかったけれどもしかし、

「斯様につつまやかな生活をしていただけ

れども、家の体面を保つための費用は、殆んど資力以上に出す様に努めた。

「而して、この点に於ては他の入費と不釣合な位にしていた。酒銭とか正月の贈物とかいうようなものは節約しなかつた。不意の出来事のためにかうした入費のかさむことは、母にもバベリーにも嬉しいことではないけれども、彼女たちは家の体面を保つ為には、吝まなかつた。私や私の二人の兄妹は常に立派な晴衣を持っていた。しかし乍ら、何時までもそれが晴衣として着られるように、私たちはそれをただ時々着るだけで、家に帰ると直ぐに脱がなければならなかつた。母が他人の訪問を待ち設ける時には、私たちの持っている唯一の室は、私たちは出来るだけの装飾をして客室となつた。」

以上の叙述は、彼の自伝となる「白鳥の歌」に見られる、彼の母やバベリーに関する叙述であるが、かかる環境は、当然、後になって彼を母性教育論者として培つたことについては、今更茲にあらためて論う必要はないであろう。

五

そうした彼の主張を、浪漫風に、物語り風に表現したものが、即ち小説「リーンハルトとゲルトルート」(Lienhart und Gertrud, 1781~88)に外ならない。

この物語りは、場面を、スイスの農村生活に求めているのであるが、女主人公ゲルトルートは、如何に教育の主役者であるかということ、そしてゲルトルートの献身的な夫と、愛児へと奉仕は、夫を見事に覚醒させ、子供たちを立派に教育し、やがて、ゲルトルートの家のみならず、腐敗し、墮落しきつていたボンナル村まで立派に更生するという所謂教育物語りである。

東洋風に表現するならば「家を齎える」ことが、やがて「天下に及ぶ」といった具合である。

酒のみのリーンハルトは、おそく家へ帰る時があつた。そんな時、ゲルトルートは「子供たちの髪をすいてやつたり、着物をつくらつたり、部屋を片附けたり。

それをし乍ら彼女はまた子供たちに、父の帰って来た時の挨拶に歌う一つの歌を教えていた。」

ゲルトルートは、毎週土曜日には「子供たちのした過失に子供らの注意を呼び起して、その週間の出来事が子供た

ちの心によみがえつて来るような教訓を教え込む習慣になつていた。」のである。

こんなこともある。

「今日は殊更、この一週間にあらわされたように神さまの有難さを子供たちの幼い心に感銘させることを切望していた。」

そして小さい手がみんな合掌された時、ゲルトルートはかういった『みんなお聞き。大変うれいお話がありますのよ。みんなの大好きなお父さんは、これまでよりもずっとお金の儲かるよいお仕事を請負なすつたのです。で、もう今日からは毎日のパンを買つたために苦勞も心配もいらぬのですよ。

坊や達、神さまにお礼をお言い。

こんなによくして戴いたお礼をお言い。

そして、一口ごとにパンを数えねばならなかつた時をお忘れないでよ！

お前たちにも一度あつたように、パンがなくて困っている人たちのことをいつもよく思つておやり！

そして、もしもお前達が必要以上にどんなつまらぬものでも持つていたら、困っている人に惜まず分けておやりなさい。

(14頁につづく)

式。前の春の休暇中に、家庭訪問をする。

(a) 幼児の生活環境、経済的背景を理解することにつとめ、(b) 事前に、幼児及幼児の保護者と親しんでおく事によって、入園式当日及その後の幼稚園生活が、幼児にとつて、親しみのあるものとして感じられる様に仕組んだものである。

大部分の幼児が担任の教師の顔を知っているため、安定感があらわれている。

(2) 年長児の家庭訪問
隨時必要に応じて、時期をきめないで行う。

以上幼稚園で実施している幼児の教育上の諸種の評価の実態並に家庭連絡のあり方を、簡単に述べてみた。評価の目的が、教育効果の判定にある以上、それは、教育方法の評価と効果の評価に大別されて、而も、両者の関連に於て考察されねばならぬ性質のものであるが、ここでは、幼児の面にあらわれた効果の評価のみに限定した。

評価を実施するに当り、私共が留意しなければならぬ点は、出来るだけ、客観性のある評価法を採用するということである。しかし数量的に測定出来るものについては、評定尺度法を用いなければならないが、この場合は

教師の観察頻度や領域が不充分であったり、主観を交えずすぎたりすると、評価されたものが客観性を欠くことになり、且信頼性が減じてくるので、評価に当っては、教師の科学的態度の修練が先ず第一に要請される。次に、種々の評価法に習熟することが不可欠の条件であると痛感する。(熊本大学附属幼稚園)

~~~~~  
(52頁よりつづく)

『そのようにしますか? 坊やたち』

『しますとも、お母さん!』

子供たちは異口同音に叫んだ。

そこでゲルトルトは時々はお昼のパンをもっと貧しい人にやったらどうかとたづねた。

そして、熱心な返事に出くわすと、彼女は各自にその贈物によって喜ばされるだろうと思つた。飢えた子供たちを考えさせた。ゲルトルトはこのようにして、現在の所謂、道徳的なしつけを、日常茶飯事のうちに、七人の子供たちに与えていつている。

子供たちは、「その贈物によって喜ばされるだろうと思つた。飢えた子供を」次々と思ひ浮べて行くのであった。

## 六

私は今、「リキンハルトとゲルトルト」の中からの煩しいまでの引用はさげよう。

くり返して言うならば、この小説の中に於ては、天の妻としてゲルトルトは夫を改悛させ、子供の母としてゲルトルトは七人の子供のみならず、近所の子供までも大きな教育的感化力を与え、さらにその教育力は、彼女の家を中心とし、部落へひろがり、さらに郷土全体にまで及ぶのである。

私はここに、家庭教育論者乃至、母性教育論者としてのみならず、教育による社会改革者乃至社会救済者としてのベストロッターの面目躍如たるものを見る。

彼は、家庭に於ける教育の使命の重大さを、母親の占める教育の切実さを身を以て体験し、経験したが故に、それは後年の彼の思想を支配するに至ったのである。

それは、イヴェルドンに於て然り、シュタツに於て然り、彼の行く処、何処にも我々は彼のそうした思想的根柢を見つけることが出来ると思つた。

私は、家庭と母の人間教育に於て占める位置の極めて高いのを改めて考えて見ずにはいられない。  
(浪速短期大学)